

地域住民の政治・行政に関する 意識についての質問構造

西 川 静 一

要 旨

一般に質問紙調査では、回答者の負担をできるだけ少なくして、なおかつ、できるだけ本質の反映された回答結果を得たい。調査計画・質問設計のときには、調査者の研究意図の反映とともに、そのことが念頭におかれる。

質問形式のうちマトリックス質問は、同一の回答選択肢をもつ質問を集めることができるため、回答しやすく紙幅も節約できるなどの理由からよく用いられる手法であるが、もっぱら調査者の経験則に依存した質問設計及び回答結果分析が行われている状況である。そのため、より合理的な質問設計及び回答結果分析の手法確立が望まれる。

そこで、本論は、以上の点から、地方自治研究会が1999年に行った近畿圏有権者調査の二次分析として同調査質問紙のなかから地域住民の政治・行政に関する意識についてのマトリックス質問を取り上げ、その質問構造等について検討したものである。

キーワード 政治・行政に関する意識、マトリックス質問、質問構造

1 はじめに

地方自治研究会は、1998年度から2001年度まで「地域社会の政治構造と政治文化の総合研究」という課題で近畿圏を中心に調査を続け、2001年9月には第一報として17編の論文からなる報告書を提出している¹⁾。その報告書に収められた論文群は、1998年及び1999年に実施した地方議会議員及び地方有権者に対する質問紙調査の結果分析を踏まえたものである。

ここでは、1999年に行った有権者調査（以下「1999有権者調査」という）を取り上げて検討する。1999有権者調査は、滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・

奈良県及び和歌山県から確率比例抽出法により約50の自治体を選び、全体で約5,000人の有権者を対象として行った質問紙調査であった。この調査における質問紙の内容は、地域社会の政治構造と政治文化に関して多様に質問項目を並べたものとなり、フェイスシートを含め質問数は38となり、A4判で12ページの相当に量的には大きいものとなった。

質問紙は薄いほうが望ましく、その回答に要する時間は30分以内とするべきとの意見があるが²⁾、1999有権者調査の場合はそれらの許容範囲を超えていたといえる。このようになった理由の第一には、同研究会のメンバーにおける多様な研究関心について質問項目にできるだけ反映させようとしたこと、第二には、そのために多量に生成された質問項目同士を合理的に調整し設計する手法が明確でなかったこと、そして第三には、各質問項目の内部構造についても合理的に調整し設計する手法が明確でなかったこと、以上の3つが主要な理由としてあげられよう。

第一の理由については、同研究会活動の動機であると同時に総合研究の点からある程度やむを得ないことである。第二及び第三の理由については、今後、同様な調査を進めてゆく上で改善してゆくべき課題となるのであり、さらに、この課題には、回答結果の分析をいかに進めるか、という課題を表裏一体的に含むであろう。

そこで、本論では、この課題を見据えながら、1999有権者調査のなかから一つの質問を取り上げて分析し、その質問構造等について検討した。本論の主題は二次分析であるが、二次分析については、最初の研究、すなわち一次分析に対して、そこで明らかにされなかった点を解明する研究であり、一次分析と対照しながら、対立仮説や批判点を明らかにして論じられるべきであるという見解がある³⁾。しかし、今回はそのような研究の立場からではなく、既実施の調査及びその結果を調査方法論の立場から再度検討するということを試みたものである。

2 検討対象の〔問22〕について

(1) 1999有権者調査における質問紙の構成

表1 質問一覧表

番号	項目	目的	形式
1	生年と性別	1	A
2	出生地と現住所	1	B
3	現住所の在住年数	1	H
4	同居家族の形態と人数	1	B
5	職業	1	B
6	現職場の規模	1	B
7	以前の主要職業とその職場の規模	1	B
8	仕事場の所在地	1	B
9	仕事場までの片道所要時間	1	H
10	投票行動	3	F
11	政治活動	3	F
12	団体加入	3	F
13	役職経験	3	F
14	支持政党	2	B
15	政党支持度	2	F
16	公平意識	2	B
17	階層帰属意識	2	B
18	重視する生活側面	2	F
19	一般的意見	2	F
20	福祉サービスとコスト	2	B
21	公平感	2	B
22	政治・行政に関する意見	2	F
23	政策に関する意見	2	F
24	ボランティア活動と住民運動に関する賛否	2	F
25	地域生活感	2	F
26	地域活動への参加経験	3	B
27	地域活動への参加希望	2	B
28	自治体観とボランティア観	2	F
29	地域メディアの利用	3	F
30	首長・議員・行政職員に対する評価	2	F
31	地域問題に対する行動	2	C
32	議員の支持理由	2	F
33	親族の公職経験	1	B
34	最終学歴	1	B
35	個人収入	1	H
36	世帯収入	1	H
37	親しい人の関係・人数・連絡頻度	2	H
38	相談相手	2	C

目的欄 1：背景および社会的環境質問 2：意見および態度質問 3：行動質問

形式欄 A：2項選択質問 B：質的多肢選択質問 C：分類質問 D：序列的質問
 E：品等質問 F：マトリックス質問 G：コンティンジェンシー質問
 H：数値質問

表2 質問の目的と形式の関係

		目 的			
		背景および社会的環境質問	意見および態度質問	行動質問	計
形 式	2項選択質問	1	—	—	1
	質的多肢選択質問	8	6	1	15
	分類質問	—	2	—	2
	序列的質問	—	—	—	—
	品等質問	—	—	—	—
	マトリックス質問	—	10	5	15
	コンティンジェンシー質問	—	—	—	—
	数値質問	4	1	—	5
計		13	19	6	38

1999有権者調査において用いた質問紙の項目について、質問の目的と形式により整理した。その結果は表1および表2のとおりである。

中道（1997, 201）は質問紙調査の質問の大部分は、①背景および社会的環境質問、②意見および態度質問、③行動質問、以上3つに大別できるとしている。この分類に基づき質問の目的を整理したところ、表1のとおりである。背景および社会的環境質問に該当するものは13項目（全体の34%）、意見および態度質問は19項目（同50%）、行動質問は6項目（同16%）であった。

また、同じく表1に示すとおり、質問の形式により分類すると、質的多肢選択質問とマトリックス質問が圧倒的に多く、両者とも15項目あり、あわせて30項目となり全体の80%を占めており、今回の調査の質問紙作成の上で重要な形式となっていることが分かる。

質問の目的と形式との関係（表2参照）において特徴的なことは、質的多肢選択質問とマトリックス質問が多く、またマトリックス質問が、背景および社会的環境質問においては皆無であるのに対して、意見および態度質問・行動質問で採用されていることであろう。

表3 マトリックス質問の比較

番 号	項 目	目 的	小問数
10	投票行動	3	3
11	政治活動	3	9
12	団体加入	3	15
13	役職経験	3	15
15	政党支持度	2	7
18	重視する生活側面	2	6
19	一般的意見	2	8
22	政治・行政に関する意見	2	14
23	政策に関する意見	2	12
24	ボランティア活動と住民運動に関する賛否	2	6
25	地域生活感	2	16
28	自治体観とボランティア観	2	8
29	地域メディアの利用	2	10
30	首長・議員・行政職員に対する評価	3	6
32	議員の支持理由	2	12

目的欄 2：意見および態度質問 3：行動質問

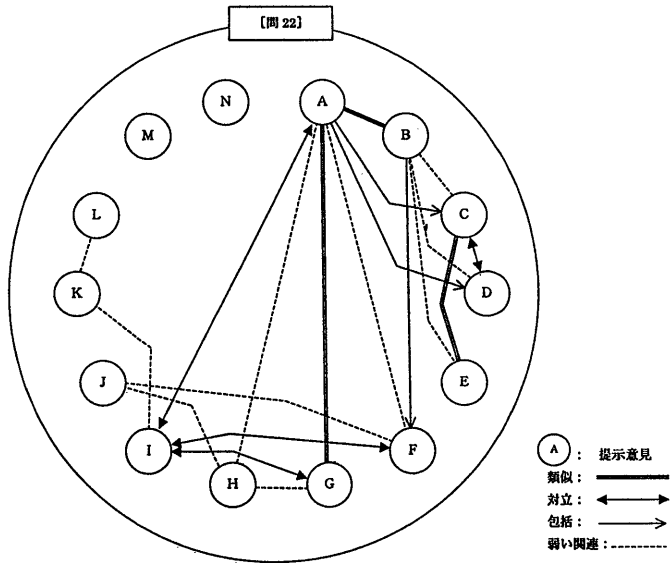


図1 「問22」に提示した意見の結果

(2) [問22] の内容

表3は、1999有権者調査に出現した15項目のマトリックス質問の規模を比較したものである。マトリックス質問の数が多く、また各規模が大きければ、それだけ質問紙の枚数が増え、回答の時間を要することとなる。以下では、このうち[問22]を取り上げて検討を進めた。

[問22]は、マトリックス質問の形式により政治・行政に関する意見をたずねたものである。A～Nの14の政治・行政に関する意見を提示し⁴⁾、それぞれについて「1 賛成」「2 やや賛成」「3 どちらでもない」「4 やや反対」「5 反対」の1～5の数字を回答者自身の考え方として選択してもらうものである。

14の意見の内容は、それぞれが全く独立しているものではなく、相互に類似あるいは対立、さらには一方が他方を包括するような関係がある。図1はこのような関係を示したものであり、そのための整理として表4には、提示した意見における質問テーマを、表5には、提示した意見に含まれるキーワード・キーワードをまとめた。

表4 [問22] に提示した意見における質問テーマ

意見番号	質 問 テ ー マ
A	現代社会における政治・政治家の役割の重要性
B	現在の日本の政治・経済の基本的変革の必要性
C	政治家の行動判断（特定の人々の利益とさまざまな立場の人々全体の利益との選択比較）
D	有権者の投票判断（特定の人々の利益とさまざまな立場の人々全体の利益との選択比較）
E	政治家の行動判断（地元のことと全体のこととの選択比較）
F	政治批判と対案提示との重要度比較
G	選挙結果・人々の政治的諸活動の政治影響度
H	投票の国民的義務感
I	政治改革と個人生活の無関係性
J	政治の改善と国民の努力との関係性
K	居住地域の改善と私生活の犠牲との関係性
L	個人の生活の向上における他の人々との協力と自分ひとりの努力の重要度比較
M	暮らし方（その日その日を楽しむか、長期計画とその着実な実行）
N	家柄・家格の大切さ

表5 「問22」に提示した意見のキーワード・キーターム

キーワード・キーターム	意見番号													
	B	A	G	F	I	J	E	C	D	H	L	K	M	N
政治	◎	◎	◎	◎	◎	◎								
政治家		◎					◎	◎						
現代のような社会	○	◎	○											
現在の日本	◎	○	○											
政治や経済のあり方	◎	○												
国や自治体	○	○	◎											
役割		◎	○											
影響／関係		○	◎		◎									
特定の人々							○	◎	○	○				
さまざまな立場の人々全体							○	◎	◎	○				
利益								◎	◎					
自分／自分たち					◎				◎	○	◎			
有権者									◎					
地元のこと							◎							
全体のこと							◎							
政治を批判すること				◎										
代案を示すこと				◎										
人々の政治的諸活動			◎	○										
選挙結果			◎							○				
投票										◎				
国民						◎				◎				
義務										◎				
よくなる（ならない）／よくする					○	◎					◎	◎		
住んでいる地域					○							◎		
私生活／個人の生活					◎						◎	◎		
努力						◎					◎			
犠牲												◎		
他の人々との協力											◎			
その日その日を楽しく過ごすこと													◎	
長期的な計画とその着実な実行													◎	
家柄とか家の格														◎

◎：当該用語を直接含むもの。

○：当該用語の意味に関連しているもの。

3 回答結果と質問の内部構造に関する検討

(1) 因子分析による回答結果の検討

〔問22〕の回答結果について、その傾向を把握し、質問の内部構造を検討するために、因子分析を行った。

表6は、バリマックス法による回転後の因子行列の結果を示したものである。主要な3因子について次のように考えられる。

第1因子は、投票の国民的義務感、現代社会における政治・政治家の役割の重要性、選挙結果・人々の政治的諸活動の政治影響度、政治の改善と国民の努力との関係性、暮らし方（その日その日を楽しく過ごすか、長期計画とその着実な実行か）、居住地域の改善と私生活の犠牲との関係性、及び政治批判と対案提示との重要度比較において、肯定的に答えると同時に、政治改革と個人生活の無関係性において否定的に答えることで共通する因子である。「政治参加積極性」とみることができるであろう。

第2因子は、政治家の行動判断（特定の人々の利益とさまざまな立場の人々全体の利益との選択比較）、有権者の投票判断（特定の人々の利益とさまざまな立場の人々全体の利益との選択比較）、政治家の行動判断（地元のことと全体のこととの選択比較）、現在の日本の政治・経済の基本的変革の必要性、及び政治批判と対案提示との重要度比較において、肯定的に答えることで共通する因子である。政治が特定の集団の利益と結びつくべきでないという考えが前面に出ていて、「政治公平性」とみることができるであろう。

第3因子は、個人の生活の向上における他の人々との協力と自分ひとりの努力の重要度比較、政治改革と個人生活の無関係性、及び家柄・家格の大切さにおいて、肯定的に答えることで共通する因子である。政治への期待度が低く個人生活を重視する「個人性」とみることができるであろう。

(2) 質問の内部構造の検討

〔問22〕の質問の内部構造については、先に示した図1、表4、及び表5のとおり、質問テーマ、提示した意見のキーワード・キータームにおける相互の

表6 [問22] についての因子分析結果（回転後の因子行列）

意見 番号	質 問 テ ー マ	因 子		
		1	2	3
H	投票の国民的義務感	0.500		
A	現代社会における政治・政治家の役割の重要性	0.491		
G	選挙結果・人々の政治的諸活動の政治影響度	0.470		
J	政治の改善と国民の努力との関係性	0.455		
M	暮らし方（その日その日を楽しく過ごすか、長期計画とその着実な実行か）	0.441		
K	居住地域の改善と私生活の犠牲との関係性	0.377		
C	政治家の行動判断（特定の人々の利益とさまざまな立場の人々全体の利益との選択比較）		0.667	
D	有権者の投票判断（特定の人々の利益とさまざまな立場の人々全体の利益との選択比較）		0.601	
E	政治家の行動判断（地元のことと全体のこととの選択比較）		0.494	
F	政治批判と対案提示との重要度比較	0.330	0.419	
B	現在の日本の政治・経済の基本的変革の必要性		0.407	
L	個人の生活の向上における他の人々との協力と自分ひとりの努力の重要度比較			0.513
I	政治改革と個人生活の無関係性	-0.308		0.451
N	家柄・家格の大切さ			0.371

因子抽出法：主因子法。 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法。（6 回反復で収束）

関係からその概略を見ることができるが、これと因子分析の結果（表6）とを比較してさらに検討を進める。

ここで、因子分析によって「政治参加積極性」「政治公平性」「個人性」と読

み取った3つの共通因子について、調査計画あるいは質問設計の段階でどの程度明確にこれを想定していたか、という問題がある。この点は、仮説構成の作業が演繹的アプローチか機能的アプローチか⁵⁾という点に関わりながら、今後の質問設計のあり方を考えてゆく上で重要な課題であろう。

図2は、図1を改変したもので、「政治参加積極性」「政治公平性」「個性性」に関する提示意見について、質問テーマ及びキーワード・キータームからみた関係を示している。

「政治参加積極性」に関する意見群では、A、G、H及びJの4つが同意見

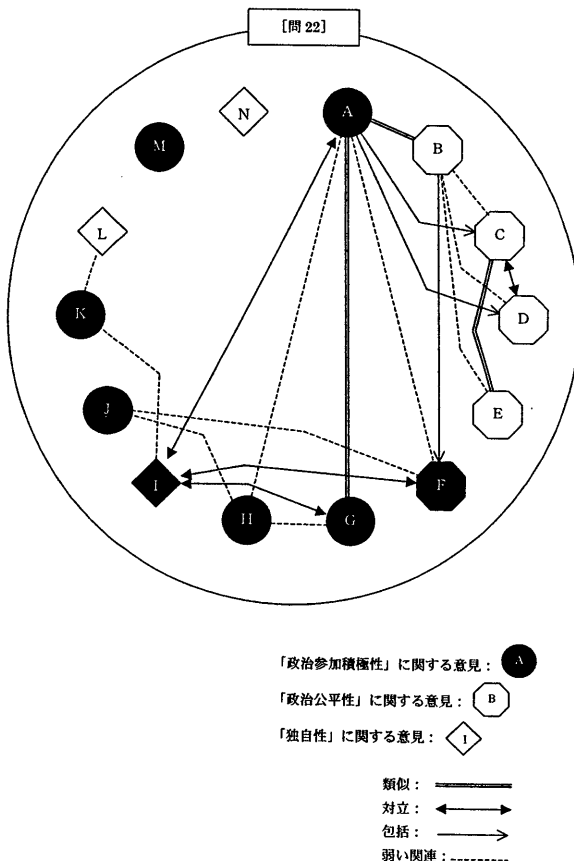


図2 [問22] に提示した意見の結果（その2）

群の中の複数の意見と関連し、当該意見の中心的意味を形成しているとみることが出来る。これに対して、Fは同意見群に属すると同時に「政治公平性」の意見群にも属するとみることが出来る点で特長があり、また、Iは同意見群に属し、かつ、同意見群内の他の意見と対立の関係にあると同時に「個人性」の意見群にも属するとみることが出来る点で特長がある。そして、K及びMについては、因子分析の結果から同意見群の中に含まれるとしても、質問テーマ及びキーワード・キータムからみた場合、Kは他の意見との関連は弱く、Mはもっぱら単独的な意見とみることが出来る。

「政治公平性」に関する意見群では、C、D、E、B及びFがこれを構成している。このうち、CとDは、政治家と有権者との立場を対比させた一对の意見であり、また、CとEは類似した意見となっている。Bについては、質問テーマ及びキーワード・キータムからみると、「政治参加積極性」に関する意見群のうちのAに類似しているとみられるが、回答結果からはその相関は際立って高いということではなかった⁶⁾。なお、Fについては、前述のとおりである。

「個人性」に関する意見群は、L、I及びNである。この意見群は、Iが前述のとおり、この意見群に属しながら、「政治参加積極性」に関する意見群において対立的意味をもって特徴的であるほかは、L及びNは単独的な意見とみることが出来る。

(3) マトリックス質問の設計課題

マトリックス質問の利点は、同一の回答選択肢をもつ質問群を集めて紙幅を有効に活用できるとともに、分かりやすいフォーマットになるため回答しやすく、その所要時間の短縮にもなることといわれている。また、難点として、分かりやすいフォーマットであるがゆえにパターン化された回答結果を生みやすいことが指摘されている。今回の検討では、このパターン化回答の問題については触れないが、重要な課題であろう⁷⁾。

ここでマトリックス質問の設計課題としてとりあげておきたい点は、設計意図の達成度あるいは実効性である。

[問22]では、その回答結果から当該質問の提示意見は「政治参加積極性」「政治公平性」及び「個人性」を共通因子とするものであった。このように一

表7 [問22] におけるステートメント分類

ステートメント		共通因子		
区分	意義	政治参加積極性	政治公平性	個人性
中核ステートメント	質問の設計意図の達成度を高め、あるいはその実効性を確保するための中核を担うステートメント。	A, G, H, J	C, D, E	
補完ステートメント	中核ステートメントを補完するステートメント。	F, I	B, (F)	(I)
単独ステートメント	中核ステートメント及び補完ステートメントと関係の薄いステートメント。当該質問群の中で異質な質問を付け加える場合などに効果をもつ。	K, M		L, N

アルファベットは、意見記号。()は重複分。

質問の中に複数の共通因子が認められることは、多様な分析を可能にする点で有効である反面、質問全体としての意図が不明確になる可能性をもっているだろう。

[問22] の場合は、表7に示すとおり、「中核ステートメント」「補完ステートメント」及び「単独ステートメント」に分類される意見群が、調査計画・質問設計段階の意図するところ、あるいはそれ以上の結果として、回答結果から「政治参加積極性」「政治公平性」「個人性」の共通因子を抽出させたものと考えられる。そこで、マトリックス質問の設計課題としては、設計意図の達成度あるいは実効性の点から、演繹的アプローチによる仮説構成に基づき「中核ステートメント」「補完ステートメント」及び「単独ステートメント」を作成し、質問の内部構造として適宜配置することが重要である。

5 おわりに

本論では、1999有権者調査の質問紙中から地域住民の政治・行政に関する意識についてのマトリックス質問を取り上げ、調査方法論の立場から分析、検討

した。

マトリックス質問は質問紙調査において多く用いられる傾向にあるが、当該質問の設計及び分析の手法が確立している状況にはない。そのため、当該質問の設計から分析までの一貫した手法を検討し、実際面において、より洗練された適用を行ってゆくべきであろう。

本論の作成にあたって、分析対象としたデータの利用については地方自治研究会データ管理責任者の許可を得るとともに、分析手法等について佛教大学社会学部の瀧本佳史助教授、同大学総合研究所の大束貴生研修員の助力を頂戴した。感謝いたします。

＜注＞

- 1) 平成10年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）『地域社会の政治構造と政治文化の総合研究』（研究代表 青木康容 佛教大学教授、研究課題番号10301011）の中間報告である。
- 2) 佐井（2001：55）は、訪問面接調査の場合の面接時間がせいぜい30分を限度とするべきことから、質問紙調査についてもこの範囲で終了できる量にしなければならないとしている。
- 3) 尾嶋（2001：199）は、佐藤ら（2000）の著書を評するに際して、1次分析に対する対立仮説や大幅な修正を迫る仮説に基づく2次分析研究は困難であるとしながらも、公開データの2次分析の研究展開の方向に注目している。
- 4) [問22] におけるA～Nの提示意見は、次のとおりである。
 - A 現代のような社会においては政治や政治家の役割はとても重要である。
 - B 現在の日本の政治や経済のありかたを基本的に変えていく必要がある。
 - C 政治家は特定の人々の利益ではなく、さまざまな立場の人々全体の利益を考えて行動すべきだ。
 - D 有権者は自分たちの利益だけでなく、さまざまな立場の人々全体の利益を考えて行動すべきだ。
 - E 政治家は地元のことも、全体のことを考えるべきだ。
 - F たんに政治を批判するよりも代案を示すほうがずっと重要だ。
 - G 選挙の結果や人々の政治的な諸活動は、国や自治体の政治に大きな影響を与え

<文献>

佐井至道, 2001, 『例解調査論』, 大学教育出版。

尾嶋史章, 2001, 「書評—社会調査の公開データ—2次分析への招待 (佐藤ら, 2000)」,
社会学評論, Vol.52, No.2, 199-201.

中道 實, 1997, 『社会調査方法論』, 恒星社厚生閣。

(にしかわせいichi 仏教大学大学院社会学研究科博士課程)

Analysis of Questionnaire Structure: A Case Study on the Area Inhabitant's Consciousness about the Politics and the Administration

Seiichi Nishikawa

We are here concerned with the structure of the matrix questionnaire. The matrix questionnaire is often used in the questionnaire form. Because, it has been proposed that the choices can be unified and space on the form can be saved with this questionnaire technique.

However, there is a problem that the design of this questionnaire and the analysis of its result depend on experience of the investigation person chiefly.

Therefore, in this article, I would like to explore a little further the method to approach the ideal structure of the matrix questionnaire.